

初風編・艦これ二次創作小説

Clown

ねえ、提督。何故泣いてるの？

私が酷いこと言ったから？

私がずっとわがまま放題してたから？

それとも、私が勝手に出撃しちゃったから？

ねえ、提督。涙を拭いてよ。

いつものように叱ってよ。

いつものように頭に拳骨ちょうだいよ。

そしたら、いつもみたいにため息ついて笑ってちょうだいよ。

ねえ、提督。

何故、私の声が聞こえないの？

何故、私の声が届かないの？

ねえ、ねえ。

……そっか。私、もう、沈んじゃったんだ。

○

「初風！ ちょっと来なさい！」

「何よ、提督。何か用事？」

厳めしい顔つきをした海軍制服の男に呼び止められ、スモークブルーの髪をした少女は不機嫌そうに振り返った。白いシャツにグレーのベストとスカート、胸元に黄色いリボンをつけた彼女は、肩まで伸びた髪をかき上げ、涼しい目で男を見上げる。

対して提督と呼ばれた男、近衛(このえ)護(まもる)少将は難しい顔のまま仁王立ちし、鋭く切れ長の目で初風と呼んだ少女を見下ろし、怒鳴った。

「なんださっきの演習は。手を抜いていたのが丸わかりだ。いくら格下であろうと失礼だろう！」

「そんなキンキン怒鳴らないでよ。良いでしょ、別に。勝ったんだから」

「内容の問題だ。あれでは演習の意味が無い」

近衛の指摘に、初風はうるさそうな顔をする。確かに、彼女は手を抜いて戦った。まるで練度の足りてない駆逐艦が主砲をめったやたらと撃ってくるものだから、のらりくらりと躲して背後を取った後、至近から八門の魚雷を全弾ぶち込んだ。火薬の代わりに詰められたペイントが盛大に飛び散り、相手の艦娘は前後も分からないほど真っ青になった。判定は当然、初風の完全勝利だ。

泣きながら帰って行く艦娘を見て、アレじゃ駄目ねとため息をつき、初風はドックに戻って主機を脱いだ。整備班に艤装を外してもらい、ドックから上がってきたところでの呼び出しだった。

「意味が無いって言うなら、最初からあんな娘(こ)出さなきゃ良いでしょ。練度が違いすぎてお話

にならないわ」

「現在我々は南方海域に出現した敵超弩級戦艦のおかげで苦境に立たされている。少しでも艦娘の練度を上げることは急務なのだ。そのための演習だと、そう言っただろう」

「それなら、もっと適任を選んで。適材適所って言うでしょ」

近衛の言葉に、初風はにべもない。話は終わりとばかりに踵を返す初風に、近衛はため息をついて軽く拳を握った。そして、ごく自然な動作で握った右手を挙げ、振り下ろす。

目の前の、スモークブルーの頭の上に。

「いったー！ 何してくれんのよ！」

「上官の言葉を蔑ろにした罰だ。何なら左手のもくれてやろうか？」

「い、いらないわよ！ 目の前に星が飛んだわ、星が！」

頭を両手でさすりながら、涙目で抗議する初風。近衛は素知らぬ顔で遠くを見る。と、そこへ廊下の向こうから近衛と同じ軍服の男がやってきた。男は近衛と初風を交互に見て戸惑いがちに敬礼すると、要件を伝えた。

「近衛提督、雁屋(かりや)中將がお呼びです。南方海域強襲偵察作戦についての会議を行うと」

「分かった。すぐに向かう」

男は再び敬礼すると、少しだけ初風を気遣うように見やって、そのまま去って行った。近衛はため息をつく、まだ頭を抑えて涙目になっている初風を見て少しだけ頬を緩める。

「会議ばかりで気が滅入る。初風は今日の演習を反省するように。帰ったら続きだ」

「はぁ!? まだ何かするつもり!? これ以上何かしたら妙高姉さんに言いつけるわよ!!」

初風の剣幕に苦笑いをしながら、近衛は彼女の頭にぼんと手を乗せ軽く撫でた。初風は突然の事に息を呑んだが、すぐに手を離して去って行く近衛に向け、顔を真っ赤にして叫んだ。

「こ、子供扱いするな!! ぶつわよ!! たたくわよ!!」

近衛はそれを背中で聞きながら軽く笑うと、片手を上げてそのまま去って行った。

○

呉鎮守府は、大本営から送られてくる戦況や作戦概要、これに対する戦力増強の要請など、様々な情報が錯綜して混沌としていた。いずれも近々行われる南方海域強襲偵察作戦への対策だ。

この二～三十年ほどの間に、海の状況は一変した。最初に目撃されたのがいつの頃だったのかははっきりしない。だが、突如として世界中の海に現れた異形の者達のことを、いつからか皆がこう呼ぶようになった。

深海棲艦。

欧米でもアビス・フリートやディープ・クロウラーなどと呼ばれる異形の存在は、その名の通り海中深くより突然現れ、航行中の艦船を次々と襲い始めた。サイズは人間と大して変わらないはずの彼らだが、軍用艦並みの高火力を有し、異形の航空機すらも自在に操るその存在に、人間達は苦戦を強いられ、次第に海路は分断されていった。

「現在、沖縄本土から坊の岬にかけての広範な領域で深海棲艦の活動が活発化しているのは諸君

も知っての通りだ」

特に日本の周辺では深海棲艦の被害が他国に比して多く、対策は急務だった。通常の軍用艦では彼らを叩く事は愚か、被害が増すばかりで一向に状況は改善しない。そんな現実を頭を抱えていた人類にさしのべられた救いの手が、対深海棲艦(しんかいせいかん)特殊人型艦船——通称、艦娘(かんむす)だった。

深海戦艦同様、彼女たちが何処から来たのか……そもそも、何者なのかすら分からない状況で運用することに始めは海軍内部でも反対が相次いだ。他に對抗手段が無い以上、彼らのとるべき選択肢は自ずと決まっていた。

「現在各鎮守府より多数の主力部隊を投入しているが、戦果は芳しくない。我が呉鎮守府でも、先日大竹艦隊がほぼ壊滅、二隻の艦娘が戦没した」

見た目も、中身も、普通の少女～女性と変わらない。だが、彼女たちのみが装備できる特殊な艦装を持ち、それによって深海戦艦と同等の武力を得ることの出来る彼女たちによって、戦況はかなり覆されたと言って良い。最低限の通商ラインは確保され、この日本でも悪くなる一方だった景気は回復の兆しが見られた。

しかしそれもそう長くは続かなかった。敵勢力の中に、これまでの深海棲艦とは比較にならないほど強力な艦が現れ始めたのだ。

「我々が戦鬼、および戦姫と呼称する超弩級戦艦クラスは、現在も沖縄本土近海を脅かしており、この排除が本作戦の最優先事項である」

これまで確認された二種の戦艦クラス、戦艦夕級およびル級を遙かに凌駕する火力、そしてこちらの攻撃を悉く無効化する重装甲を併せ持った驚異的な存在。出現当初、それらは一律「鬼」クラスと称されたが、その後更に強力な艦の存在が確認され、それらを「姫」クラスと呼称することとなった。

今回は南方棲戦鬼および南方棲戦姫と名付けられ、各鎮守府より討伐隊が編成されたものの、結果は惨憺たるものだった。駆逐艦や軽巡洋艦程度の火力では全く歯が立たず、重巡洋艦以上の艦隊でも与えられるダメージは微々たるもの。それに加え、他の艦には無い自己修復機能が存在するらしく、例えそれなりのダメージを与えて撤退したとしても、次の進撃時には全てが水泡に帰している事になる。

「現在、横須賀鎮守府にて戦艦・長門を旗艦とした艦隊が編成され、作戦準備中であるが、我らも支援艦隊を編成し、これをサポートすることとなる」

ざわ、と会議室がざわめいた。長門は、これまで温存されていた超弩級戦艦クラスの艦娘だった。運用に際して主機の食う燃料や使用する弾薬などの資材が半端ではないため、半ばもてあましていたとも噂されるが、南方棲戦鬼・戦姫が出現してからおよそ一年の間、ほとんど何の戦果も上げられない状況に、大本営もようやく重い腰を上げたらしい。

ざわめきが続く会議室を咳払い一つで制し、会議を取り仕切る男、葛城 新(あらた)大將は続けた。

「我々の運用できる艦娘もそう多くは無い。現在航空母艦・翔鶴および瑞鶴を中心とした艦載機によるアウトレンジ戦法を研究中だが、他に何か意見のある者はいるか」

再び、室内がざわつく。集められたのは少将以上の人間ばかりだが、艦娘の運用経験のある者はそれほど多くない。前回の出撃で大敗を喫した大竹少将もいたが、彼が主張していたのは高速艦隊によるヒット・アンド・アウェイ戦法だった。前線に陣取る戦鬼に近接・砲撃しすぐさま転進、追ってきたところへ更に砲撃を繰り返す、戦鬼を孤立させて撃滅するという作戦であったが、思うように戦鬼を誘導することが出来ず、逆に敵艦隊による囲い込み総攻撃を食らった。重巡洋艦一隻、軽巡洋艦一隻を失いながらも艦隊が帰還出来たのは奇跡と言っても良い。

そんな中、じっと腕組みをしていた近衛が手を上げた。「近衛少将」と発言許可の旨を告げられると、彼は淀みなく発言した。

「意見具申いたします。小官はアウトレンジ戦法に加え、潜水艦を用いた群狼作戦を提案します」

この提案に、室内が一瞬水を打ったように静かになった。群狼作戦は、相手の進路予測上に潜水艦群を配備し、予測海域に進入してきた艦を波状攻撃する、いわば待ち伏せ戦術だ。基本的には輸送船に対して行われるが、それ以外にも効果はある。ただし、あくまで相手の進路が読める場合の作戦だ。

葛城大將は近衛の真意をすぐさま理解したようだったが、すぐには肯定しかねる様子だった。「敵艦隊を航空隊でおびき寄せ、進路上で待ち伏せ叩く、という事だな。だが、そのためにはアウトレンジ戦法が一定の効果を上げるという保証が無ければならない。最悪、潜水艦は無駄になる」

無駄、という言葉にやや重点を置いた発言に、提督は「理解しています」と返した。現在呉に在籍している潜水艦は五隻。伊号一五六から一五九までの四隻と、比較的新鋭の伊号一六八。通常戦闘においても活躍の場が多い彼女たちを投入した場合、鎮守府近海での戦闘が疎かになる可能性がある。

しばらく各将校間で意見が交わされたが、結論は一旦保留となった。通常海域における深海棲艦の活発化も無視できないという意見が多かったからだが、何より潜水艦を艦隊に保有する将校からの反発が少なくなかったことも大きい。大竹艦隊の壊滅が、将校達をナーバスにさせていた事もあるのだろう。

「作戦の決行までにはまだ猶予がある。それまでに各隊意見をまとめ、次回最終判断とする」

三日後の再会議が宣言されると、各将校は千々に去って行った。近衛も席を立ったが、すぐさま葛城に呼び止められた。

「近衛。お前の艦隊の状態はどうだ」

「今のところ、問題はありません。初風がやや力を持て余しすぎですが……」

「話は聞いているよ。演習相手を完膚なきまでに叩きのめしたそうだな」

そう言って、葛城は豪快に笑った。近衛は苦笑いしながら「申し訳ありません」と謝罪したが、葛城は手を振ってそれを制した。

「構わん、元気で結構。それよりも、妙高の事が気になってな。沈んだのは、実の妹なのだろう？」

「羽黒、ですか」

大竹艦隊で沈んだ重巡・羽黒。妙高型と呼ばれる四隻の重巡の末妹でもあり、妙高の実の妹でもある。

艦娘達は、皆生まれながらに艦娘であるわけではない。基準は不明だが、彼女たちのみが装備できる艦装にあわせ、後天的に艦娘として覚醒すると言われている。そのときに何らかの記憶を上書きされると考えられており、元々の関連性の無い娘同士でも艦装の元となった艦船の関係性と同様に姉妹の関係となる。

妙高・那智・足柄・羽黒の四隻が妙高型と呼ばれる姉妹艦にあたるが、妙高と羽黒は艦娘にしては珍しい実の姉妹でもある。同時期に呉に着任となったが、戦力バランスの問題で艦隊は別々となっていた。

「報告を受けた日は、流石に塞ぎ込んでいたようです。カウンセリングも受けさせましたが、今は落ち着いています」

「そうか、なら良い」

葛城はそう言って近衛の肩をぽんと叩いた。総司令である葛城には、艦娘達の状態を把握して常に万全の状態にしておく義務がある。中でも妙高は葛城の元秘書艦でもあり、特に気にかけているのだろう。

近衛は一礼すると、会議室を後にした。自室に戻るまでの間に、近衛は考えを巡らせる。確かに、妙高の状態は一見落ち着いて見える。秘書艦としての仕事もほぼ完璧にこなし、演習にも今のところ積極的に参加している。しかし、近くで見ている者には彼女にまわりつく影があることに否応でも気付く。

彼女を最も慕っている初風は、彼女の負担を減らそうと奮闘している。秘書艦代理も買って出ており、演習での振る舞いもそういった気負いの表れでもあるのかも知れない。

「少し、今後のことを考えた方が良いかも知れんな」

呟きながら自室に入ると、初風が書類整理をしているところだった。正式な秘書艦は現在も妙高のままだが、週に二度は妙高の静養と演習のために初風が秘書官を務めている。

「何よ。遅かったじゃない」

近衛の方をちらりと見ると、初風は再び書類整理に戻った。黙々と作業をしているように見えるが、何となく頬を膨らませて時折こちらをちらりと盗み見ている。近衛は苦笑しながら執務机に着いた。

「留守中変わったことは」

「無いわ。窓から猫が入ってきたことくらいかしら」

「それは一大事だ」

やや大袈裟な身振りをする近衛を鼻で笑い、初風は書棚の本を並べ直す作業に入った。いつものことなので気にすることも無く、近衛は整理されて机の上に置かれた書類に目を通す。

しばらく無言の時間が続いたが、ややあって書棚の整理をしながら初風がぼそりと呟いた。

「……で、どうだったの」

「ん？」

聞き取れなかった近衛が、書類から目を上げて初風の方を向く。作戦書の束をファイリングし

ながら、初風は唇を尖らせて怒ったような声でもう一度言った。

「会議はどうだったのって言ったの。南方作戦の会議でしょ」

近衛の方を振り返った初風だが、目が合うとさっと反らして再び書棚の方を向いてしまった。近衛は何となく居心地の悪さを感じながらも、今日あった会議の内容をかいつまんで説明した。実際は結論が先延ばしになってしまっているが、空母を最大限利用したアウトレンジ戦法がメインになるのは決定だろう。群狼作戦については、潜水艦を保有する艦隊の意向が大きいため、採用されるかどうかは分からない。

そこまで話すと、初風は何故か眉をつり上げて振り返り、今度こそ怒声をあげた。

「なんで私たちの出番が無いわけ!? 練度で言えば、私たちの艦隊が先陣切るのが当たり前でしょ!？」

「落ち着け、初風」

握り拳を書棚に叩きつけんばかりの剣幕に、近衛は落ち着いた声で語りかけた。初風はしばらく拳を振るわせていたが、やがて観念したように手を緩めた。

近衛の有する近衛戦隊は、秘書艦である重巡・妙高を中心とした、どちらかというと言雷戦をメインとした部隊だ。駆逐艦として初風・雪風・天津風・時津風、軽巡洋艦として神通が在籍しているが、全員が揃って出撃することは少ない。近衛の元、様々な戦闘をくぐり抜けてきた彼女たちは、その練度故、他の艦隊のサポートや、時に指揮を任されることが多かった。特に神通は駆逐艦隊の嚮導艦(きょうどうかん)として駆り出されることが多く、戦隊のメンバーと顔を合わせることも少ない。

そのため、呉鎮守府内でも一二を争う練度の艦隊にも関わらず、今回の南方戦線には一度も出撃すること無くここまで来ていた。

「我々の艦隊には戦艦がない。最高火力を有する妙高でも、敵超弩級戦艦を相手にするには荷が勝ちすぎている。練度だけではどうにもならないこともある」

「主砲の火力なんて関係ないわ。私たちには一撃必殺の雷撃がある。例え相手が戦艦だろうと空母だろうと、私の魚雷で」

「初風」

まっすぐ彼女の目を見つめ、声を低める近衛に、初風はぐっと言葉を詰まらせ顔を背けた。作戦を立てるのは、あくまで提督だ。秘書艦や旗艦は現場の状況に合わせた判断はするが、基本となる作戦に口を出さないのが暗黙の了解だ。それは、初風も分かっていた。

近衛はふうっとため息をつく、手招きして初風に近くに来るように促した。一瞬躊躇した初風だが、素直に提督の傍らに立つ。近衛は机の上に置かれていた書類の一つを手にとると、彼女に手渡した。受け取った初風の顔色が、さっと変わる。

それは、呉で今月戦没した艦娘の合同葬儀の案内状だった。今季最多となる三隻の艦娘を喪った呉鎮守府で、初めて執り行われる試みだ。中には、妙高の妹である羽黒の名前も載っている。記載された開催日は、一週間後だった。

「明日、正式に公表されるものだ。妙高は身内だから事前に知らせてはあるが」

「……こ、こんなの、いまさら」

「ああ、今更だ。だが、我々はそれだけ今回の大敗を重く見ている。慎重に検討を重ね、これ以上の犠牲を出さぬようにしなければならない。これは、そのための戒めでもある」

案内状を持つ手に力が込められ、くしゃりと折れた。肩を震わせうつむく初風を、提督は黙って見守っている。

合同葬儀の開催に関しては、これも各将校の間で紛糾した。いたずらに他の艦娘を刺激することになるのでは無いかと言う意見も多かったが、最終的には粛々と執り行うという方向で進行した。深海に沈み、遺体すら上がらなかった彼女たちを正式に弔ってやりたいという提督達の意向も大きかった。

「……こんなを見せて、どうする気。だから出撃を諦めろとでも言うつもりなの」

「さっき言っただろう？ 慎重に検討を重ねる。その上で誰が出撃するかを決める。それが今言えることの全てだ」

近衛の言葉に、初風はキッと近衛を睨み付けると、案内書を彼に投げつけるようにして部屋を後にした。それを再度のため息とともに見送ってから、しわになった案内状をぼんやりと眺める。

妙高に案内状を手渡した時の事を、近衛は思い出していた。「羽黒は幸せ者ですね、こうして弔えて貰えて」と呟いた妙高は、様々な感情を噛み殺すように、寂しげに笑っていた。そこで彼女がこぼした言葉が、近衛には強く印象に残っている。

次こそ、辛い思いをしなくても済めば良いのですが。

その言葉の意味を、近衛はずっと考えていた。艦娘達の上書きされる記憶。その中に、明らかにこの世ならざるもの、より正確に言えば、この世界と類似の別の世界の記憶ではないかと思われるものが含まれている。

彼女たちは、自分たちを「艦(ふね)」だという。艦装を装備できる人間では無く、艦だと。或いはそれが真実なのかも知れない。こことは違う、何処か別の世界で、彼女たちは艦だった。終わりのなき戦いを続ける、戦船(いくさぶね)。その魂が人に宿った者が、艦娘だとしたら。

そこまで考えて、近衛は頭を振った。そんなことは、今考えることではない。例え彼女たちが、終わらない戦いから逃れられない運命を背負った艦だとしても、我々はそれにすぎるしか無い。ならばせめて、一隻たりとも沈めぬ覚悟と決意をもって指揮に当たらねばならない。近衛は、そっと案内状を机に置き、改めて意を固めた。

これ以上やらせはしない。我々は、そのために存在するのだから。

○

「司令(しれえ)とは、ちゃんとお話しできましたか？」

ライトブラウンのショートヘアを弾ませ、くりっとした瞳の少女はやや舌足らずの口調で、ぼんやりと歩く初風に声を掛けた。初風は横に並んだ少女を目だけ動かして確認すると、短くため息をつく。

「……別に。あんたこそどうなの、雪風。調子は戻ったの」

「大丈夫！ ちょっと艦装に傷がついただけ」

雪風と呼ばれた少女は、そう言って笑った。哨戒任務中に敵艦の流れ弾が掠めたと聞いていたが、ぴんぴんしているようだ。「相変わらず運が良いわね」と言いながら歩く初風は、対照的に暗い表情をして、顔もうつむき加減だ。

その様子に少し心配そうな顔をした雪風は、胸元に下げた双眼鏡を撫でながら初風に尋ねる。「やっぱり、出撃したいです？」

控え目な問いかけに、初風は暗い顔のまま答えた。

「当然よ。私たちは、そのためにいるんだから」

その言葉に、雪風は少しだけ寂しそうに笑う。

彼女たち艦娘は、軍用艦だ。日本国海軍に所属し、船籍登録もされている。艦娘として軍に徴用された時点で本来の戸籍は凍結され、役目を終えて艦装を解体されるまで軍の所有物として扱われる。

勿論、彼女たちが自立している以上、周囲は彼女たちを人と同じように扱うし、法的に艦船扱い故に階級に縛られない彼女たちは、軍内部での行動に関してはほとんど制限は課されない事にはなっている。だがそれは、あくまで彼女たちが対深海棲艦兵器であるという前提の上に成り立つ話だ。

「あんたは良いわよ。定期的に実戦に出させてもらって。私はここのところ、ずっとつまらない演習ばかり。南方作戦にも、出してもらえそうに無いし」

「司令にも、きっと色々とお考えがあるのです。天津風と時津風も、今の遠征任務が終わったら前線に出る予定と聞いたのです」

「……そこに、私の名は無いわね」

肩をすくめる初風。雪風は余計なことを言ったと口を両手で軽く押さえた。初風は特に気にした風も無く、そのまま廊下を歩いて行く。

少し離れてついて行く雪風は、どう彼女をなだめたものか考えていた。確かに、初風は近衛艦隊の中で妙高に次いで練度が高いにも関わらず、あまり実戦には出ていない。特に最近彼女の言う通り、演習で他の艦娘を相手にしていることの方が多い。

近衛の言うことは、半分正しい。南方戦線に主力部隊が出払ってしまうため、近海の守りが手薄になってしまっている。そのために、新参の艦娘も実戦投入しなければならず、練度不足の彼女たちを鍛える必要がある。その役割を初風が担っているというのが理由の一つだ。

しかしもう一つ、彼女が前線に出されない理由がある。

「……首、もう良いのです？」

「……………」

初風は黙ったまま、歩き続ける。

南方作戦が始まる前のある作戦で、珍しく近衛艦隊六隻が揃って出撃することがあった。作戦自体は航空基地に進撃してくる深海戦艦を掃討するという極めて単純なものだったが、敵の数が多く、一時的に退路を断たれて混乱に陥った。その際、挟撃を受けて回避行動を取った妙高と初風が衝突したのだ。

初風は海面に叩きつけられ、首を負傷した。全身の状態に問題は無かったが、軍医の診察で頸椎剥離骨折と軽度の頸髄損傷が判明している。しばらく安静にしていれば前線復帰は可能と言われていたが、今でもその影響でたまに左手の指先にしびれを生じていた。

「こんなもの、全然問題ないわ。あのブーゲンビルに比べれば」

初風が漏らした言葉に、雪風は途端に泣きそうな顔をした。それは、遙か遠い記憶。彼女たちが彼女たちである前の、根源たる世界の記憶。

「……そうよ。何でも無いことだわ」

初風はそう言い残し、そのまま去って行ってしまった。雪風は、その後ろ姿を黙って見送ることしか出来ないでいる。彼女の前線へ出たいという思いは、彼女の根源に横たわる無念と、そして執念。それが痛いほど分かる雪風に、それ以上掛ける言葉は無かった。

○

彼女は、思う。

自分たちがここに来た理由は、何だろう。

様々な戦場を渡り歩き、傷つき、多くの死を見つめ、そして自らも冷たい海に没した。

自分の中に確かに存在する、死の記憶。それを超越してまで、この世に再び解き放たれた意味は何だろう。

対深海棲艦特殊人型艦船。

深海より這い寄る異形の存在を狩る、海の狩人。

本当に、それだけなのだろうか。自分たちには、もっと他に意味があるのでは無いか。もっと重大な使命があったのではないか。

否。そんなものは、始めから無い。

私たちは戦うために生まれてきた。

私たちは、戦い勝つために生まれてきた。

勝利の栄光を、捧げるために。

捧げる……誰に？

それは……。

○

「……本気ですか、葛城司令長官。駆逐隊による雷撃作戦を潜水艦隊の群狼作戦と組み合わせると」

「ああ、そのつもりだ」

三日後の再会議で葛城が切り出した作戦概要に、近衛は驚きを禁じ得なかった。確かに潜水艦同様、駆逐艦の魚雷は装甲の固い戦艦にも有効だ。速力も早く、敵を攪乱しつつ攻撃できる。だが、大竹艦隊はまさにその雷撃作戦で失敗している。敵艦隊のおびき出し方が問題という指摘

もあったが、それを差し引いても相手に通用するとは思いがたい。

他の将校達にも戸惑いが広がったが、葛城は作戦要綱の説明を続けた。基本は空母を起用したアウトレンジ。高速航行可能な第一陣が戦鬼あるいは戦姫に近接、砲撃で陽動し、第二陣である水雷戦隊が雷撃。更に相手をおびき寄せ、待機している潜水艦が仕留める。

大竹のとった作戦に似ているが、同一艦隊が何度も敵艦隊に近接する必要が無く、一艦艇あたりの弾薬消費を抑えることが出来る。また、艦隊を三段構えにすることで、万一敵に包囲された場合の救済もある程度可能となる。

「しかし、現段階で敵艦隊の猛攻をかいくぐって雷撃戦を挑める練度の駆逐隊はそう多くありません。各部隊から艦娘を集めて部隊再編を……」

「私が行くわ」

突如葛城の背後から聞こえてきた声に、室内は静寂に包まれた。誰もが思いがけない姿が現れ、次いで場は騒然となる。

近衛は、その姿に驚き、僅かに怒りをにじませた声で投げかけた。

「……何故ここにいる、初風」

スモークブルーの髪を掻き上げ、無表情の初風は葛城の持つ作戦要綱を指さす。

「私が具申したのよ。超長距離から近距離まで、相手を直線上におびき寄せる作戦。間に陽動艦隊をかませれば、群狼作戦の成功率がより高くなるわ」

「そんなことを訊いているんじゃない！ 一艦娘が司令長官に意見具申など、許されるものでは……」

「落ち着け、近衛」

噛みつかんばかりの剣幕で怒鳴る近衛を、葛城が制した。初風は表情を変えぬまま、じっと近衛の方を見ている。

荒い呼吸を何とか押さえ込む近衛を待ち、葛城は言った。

「この作戦自体は、私も考えていたものだ。初風は私の背中を押したに過ぎん。いささか強引ではあったがね」

「し、しかし」

「確かに、艦娘の作戦行動への意見具申はあまり例が無い。だが、明確に禁止されているわけでもない。有用な意見は採用する、それが私の方針だ。異論はあるか？」

葛城にそこまで言われて、近衛には反論する余地は無かった。黙って身を引くと、勝手な行動に出た初風を再度にらみつける。初風は何でも無いように受け流すと、そのまま一步後ろに下がった。

室内に静寂が戻ると、葛城は咳払い一つして編成を読み上げた。

「第一陣は小森隊、第二陣は近衛隊、第三陣は相馬潜水艦隊とする。雁屋中将は翔鶴・瑞鶴を軸に空母機動部隊を再編せよ」

「「了解」」」

「……了解」

他の三人に遅れ、近衛は渋々敬礼する。空母機動部隊の再編と、各隊に分散されている近衛戦

隊の再集結を待って作戦が開始される事が告げられると、場は解散となった。

初風は、葛城の後ろから動かなかった。近衛は憤然とした様子で踵を返すと、初風と目を合わすことも無くそのまま会議室を後にする。苦笑交じりにその様子を見ていた葛城は、後ろでため息をつく初風を振り返った。

「あれで、良かったのか？」

「……良いのよ。あれくらいしないと、うちの提督は動かないんだから」

自分が出撃するためには、いくら提督を説得しても無駄だ。それなら、もっと上から説得してもらえば良い。そう考えた初風は、無茶を承知で葛城に直接交渉をもちかけた。階級に縛られない存在といえど、鎮守府の最高司令官に直訴して通るかどうかは初風にとっても賭けだったが、意外にも葛城は快く申し出を聞き入れた。

葛城にとっても、近衛戦隊の投入は前々から考えていたことではあった。だが、初風が首に決して軽くは無い怪我を負い、妙高は実の妹を喪うと言う精神的な傷を受けた今、果たしてそれが最良の選択かどうか決断しきれずにいた。

近衛が初風を実戦投入しないのは、彼女の傷を慮ってのことだと、誰もが知っている。だが、姉妹艦である雪風は今でも前線に向かい、天津風・時津風も遠征や哨戒任務に活躍しているときに、彼女一人が演習担当なのを問題視する声も少ないながら存在した。

多少荒療治だが、これで近衛も真剣に初風と向き合うようになるのでは無いか。そういう思惑が葛城にもあったのだが、今日の様子を見ると逆効果だったかも知れない。葛城がそう漏らすと、初風は首を振った。

「それくらいでちょうど良いの。私たちは艦娘。戦うための艦。戦えない艦に、意義は無いわ」
提督は優しすぎる。呟くように付け加えた言葉は、誰にも届くこと無く霧散した。

○

「敵艦隊発見！ 第一・第二主砲斉射、始めます！」

妙高の声が響き、二〇、三センチ連装砲が火を噴いた。先行する小森隊が討ち漏らした軽巡へ級を夾叉し、次弾できっちり仕留めると、続いてやって来た敵艦爆に機銃を向ける。

「天津風、時津風！ 敵艦載機に気をつけるのです！」

「分かった！」

同じように機銃を放ちながら、二隻の艦娘は妙高との距離を一定に保ちつつ空に目を光らせた。その後ろに初風、雪風が並び、最後尾を神通が守る。

作戦の序盤は順調とも言えた。小森隊は高速戦艦・榛名を旗艦とした艦隊で、速力を生かした戦いで敵を翻弄しながら目的地に向けて突き進んでいく。討ち漏らした敵艦がたまに第二陣である近衛隊の方にやってくるが、ほとんどは軽巡や駆逐艦で、彼女たちにとっては問題にならない敵だ。それよりも厄介なのは敵の艦載機で、制限が無いのではないかと思えるくらいの数が飛来する。命中精度は決して高くないが、ここで討ち漏らすと後方の空母機動部隊の作戦に支障を来しかねない。

「こちら近衛戦隊旗艦、妙高。小森隊、目標は見えますか？」

「こちら小森隊旗艦、榛名。目標はまだ見えません。このまま進攻します」

第一陣の無線による報告を受け、妙高は第一戦速維持のまま前進を指示した。相変わらず敵艦載機はやかましく飛来するが、それさえ気をつければ、それほど熾烈な海域では無いように感じる。

第一陣が頑張ってくれている所為だろうか？ それとも、前回の対大竹艦隊が大敗を喫するまでに敵勢を削いだから？ 妙高は何故か胸騒ぎを覚え、他の艦娘になるべく艦同士の距離をとるように指示した。

元々今回の作戦には、妙高は参戦しない方向で話が進んでいた。合同葬儀が済んですぐの出撃でもあったし、第二陣の役割はどちらかというとならぬ群狼作戦のつなぎだ。高速で敵艦隊に接近し、雷撃を仕掛けたら即座に同海域から離脱する。それで相手が沈めば良し、沈まずとも彼女たちを追って敵艦隊が潜水艦の射程内に入れば上等だ。道中敵艦隊との戦闘もあるかも知れないが、第一陣の討ち漏らしを仕留める程度と見積もられていた。

だが、妙高は参加の意思を強く示した。近衛戦隊旗艦として、自分だけ安全な場所にとどまるわけにはいかないと。それに、万が一第一陣が敗走した場合、第二陣の戦略的撤退を安全に行うためには軽巡と駆逐艦だけでは火力不足になるだろうと。いつになく力説する妙高に近衛も折れ、久方ぶりに近衛戦隊全員が揃っての出撃となった。

「でも、良かったの？ 妙高姉さん。羽黒さんの葬儀が終わってすぐなのに」

初風が無線で問いかける。妙高は寂しげに笑うと、ほんの少し視線を落とした。

「良いのよ。もう気持ちの整理はついたもの」

「でも……」

「それにね」

何か言おうとした初風を制し、妙高は先程とは違う真剣な瞳で、真っ直ぐ前を見た。

目の前に広がる、深く、蒼い海を。

「あの子はまだ、この海にいる。深く昏い水底で、一人寂しく眠っている。だから……」

「姉さん、まさか」

初風の凍り付いた声に、妙高は見えないと分かっているながらも首を横に振った。

「違うのよ、初風。私は、あの子にお別れを言いたかったの。この海で。あの子のいる、この海の真ん中で」

その声は何処までも優しい声で、初風は思わず胸を押さえた。妙高はもう既に十分に羽黒の死と向き合い、既に受け入れたのだろう。後は、お別れを言うだけなのだ。

そのためには、まずは忌々しい深海棲艦達に一矢報いなければならない。妙高にとってこれはある意味弔い合戦なのだと、初風は理解した。しかしその理解をやんわりと否定するように、妙高は言葉を続けた。

「戦いの勝敗は、どちらでも構いません。でも、こうしてお別れを言いに来た以上、私たちは生きて帰らねばなりません」

「……………」

「ですから、くれぐれも無茶をしてはいけませんよ、初風。提督のためにも」

「な!? なんでそこで提督が出てくるの!?!」

妙高の含みのある言葉に、初風は思わず咳き込みそうになった。妙高は、ふふ、と笑みをこぼしただけで、それ以上の通信は寄越さない。初風は慚然とした表情のまま無線を切った。

○

結局、出撃の日まで初風は提督とほとんど言葉を交わさなかった。合同葬儀の時は妙高に変わって初風が秘書艦をしていたが、その時も最低限の言葉以外は世間話すらしなかった。

作戦の概要は初風が具申したものからほとんど変わっていなかったが、横須賀鎮守府の戦艦・長門を有する榊原隊の出撃にあわせて一部変更された。こちらが先行してある程度敵勢力を減らし、榊原隊がその後一気に進撃する手はずとなっているが、鬼または姫クラスと交戦となった場合は全力で叩き、少しでもダメージを蓄積するようにと葛城からは指令を受けている。

近衛からは、何の指令も無かった。当日指揮の全権は旗艦である妙高に委ねられ、近衛・小森・相馬・雁屋の各隊の提督は作戦海域に最も近い佐世保鎮守府に移動、待機している。提督自ら戦闘支援艦に乗船して艦娘達に無線で直接指示を出すこともあったが、今回は戦闘の激化が予想されるため見送られた。

「いつもながら歯がゆいものだな。ただじっと待つだけとは」

「仕方ありませんよ、雁屋中将。深海棲艦が相手では、我々はただの足手まといですから」

雁屋の言葉に、小森少将は肩をすくめる。彼らが戦闘海域に出撃するためには、どうしても船に乗らねばならない。人と同じくらいのサイズしかなく、高速移動も出来る深海棲艦にとって、巨大な船はただの的だ。

「艦娘と違い、我々指揮官は替えが効く。前線に出ても支障はあるまい？」

「伊号達が泣くぞ、相馬。貴様は口が悪い」

皮肉めいた言葉を漏らす相馬少将を、雁屋がたしなめる。彼の言うとおり、艦娘には代わりがない。一度沈んでしまったら、次に艦娘の記憶と能力を引き継ぐ者が現れるまで待たねばならない。それが何年後か、何十年後か、誰にも分からないのだ。

さらには艦装の復元にも多大な時間と膨大な予算が必要となる。修復にかかる材料はそれほどでも無いが、艦装を一から作る場合は通常の艦船を建造するのと同じくらいのコストが掛かる。何故なら、彼女たちの艦装は概念変容によって歪められているだけの、一隻の軍艦だからだ。

彼女たちは、既存の軍艦を身に纏い、戦っている。彼女たちの身分が艦艇として扱われる理由の一つが、そこにある。

「……信じて待つしかない。そのための研鑽を、我々は彼女たちと積んできた」

近衛の言葉に、皆が黙り込んだ。待つしかない。だからこそ、信じて待つに足るだけの力を、知恵を、あらゆる経験を、彼女たちと積み続けてきた。それが、彼女たちを無事に帰還させる結果につながると信じて。

現在を指揮する立場から、未来に向けた道筋を指揮する立場へ。彼らの仕事は、大きく変わ

った。

(だが、私は彼女たちを信じ切れていただろうか)

近衛は、自問する。半ば喧嘩別れのような状態のまま初風を出撃させてしまった事を、近衛は悔いていた。彼女を出撃させてこなかったのは、彼女の状態を案じてのことだ。次に頸部を損傷した場合、最悪死に至ると軍医からも言われている。もちろん、演習で怪我をしない保証はないが、前線に出るよりは可能性は低いはずだ。そう考え、近衛は初風を演習要員として運用していた。

彼女が前線に出たがっている事は、彼女自身の口から嫌と言うほど聞かされた。だがそれも、自分の症状を把握した上での願望の吐露であると思っていた。だから、彼女が司令長官に直訴したことが分かった時、近衛は怒った。

初風に、だけではない。自分自身にも。

過信や盲信は絶対に許されない。だが、彼女たちの実力を正當に評価し、その上で然るべき戦いの場へ送り出してやること。それが出来ずして、何が提督か。

その結果、彼女を激戦区へと送り込む事になったのでは無いのか。

(……無事に、帰還してくれ)

静かに揺れる海を見据え、近衛は初風達の無事を祈り続けた。

○

「早く、消えなさいよ！」

初風の主砲が火を噴き、巨大魚のような駆逐口級の鼻っ面を掠めた。口級はこちらに回頭して追撃を試みるが、背後からの雪風の砲撃で土手っ腹に穴が空き、そのまま沈んでいく。次いで亜人型の軽巡ホ級が二隻こちらに向かってくるが、妙高と天津風・時津風の砲撃を喰らって轟沈した。

「急に数が増えたわ！ どうなってるの!？」

「敵泊地に近づいたのです。増援を第一陣が討ちきれなくなってきたのよ」

初風の苛立った無線に、妙高は冷静に返答した。流れてくるのは駆逐・軽巡クラスだが、そこそこ数が多く、また瞳に赤い光を宿し、武装と装甲の増したエリートと呼ばれるサブクラス艦が出現してきている。

こうなると海上の戦いに集中せざるを得ず、次第に敵艦載機の討ち漏らしが増えてきていた。一機や二機は味方の艦載機が問題無く始末してくれるだろうが、見逃しすぎると相手に制空権を取られかねない。そうなったら作戦はほぼ失敗だ。何の手柄も無いまますごすご撤退することになる。

焦れる初風の前方に、爆音を連れて水柱が上がった。はっと気付いたところへ、背後に着弾音。

「しまった、夾叉！ 最大戦速！」

主機の回転数を一気に上げ、初風は真横に滑るように海面を走った。二秒ほど遅れて先ほどま

で初風のいた場所に水柱が上がり、肝を冷やす。そのまま蛇行を続け、初風は近づいてきた軽巡へ級エリートに主砲を叩き込んだ。一発は直撃したようだが、流石に装甲の充実したエリート亜級はしぶとく、せいぜい中破止まりで沈む様子はない。

白煙を上げたままなおもこちらに向かってくるへ級に、初風はうんざりした声をあげた。

「なんでこっち来んのよ！ 沈みなさい！」

さらに主砲を数発打ち込み、へ級の轟沈を確認すると、初風は妙高に無線をつなげた。

「妙高姉さん、第一陣はまだ生きてるの!? こんなに討ち漏らしがあるなんておかしいわよ！」

叫ぶように言う初風に、しばらく間を置いて妙高から返答があった。

「第一陣は現在敵主力と思われる艦隊と交戦中、そろそろ撤退を始めるようです」

「主力……南方棲戦鬼!?」

とうとう敵の主力のお目見えらしい。初風は無意識に背負った魚雷を撫でた。自分たちの役割はあくまで陽動。だけど、その間にありったけの魚雷を撃ち込んでやれば、上手くいけば沈めることだって出来るかも知れない。戦果を挙げれば、提督も認めざるを得ないはずだ。自分が、前線に必要な存在だと。

認めて欲しい、私を。そして……

「……！ 全艦回頭、反方位！」

妙高の鋭い声に、初風は冷水を浴びせられたように背筋を伸ばした。これまでに聞いたことのないような緊張感をはらんだ命令に、彼女は思わず反論する。

「なんで急に!? 主力はもうすぐ目の前じゃ……」

「第一陣は全艦中大破、これ以上作戦は続けられません！」

「な……！ そんな、さっき交戦を始めたばかりじゃ……」

信じられない思いで説明を求めようとする初風。だが次の瞬間、彼女は全身で感じ取った。一体、そこで何が起きたか。そして、何がそれを成したかを。

——ナンドデモ……ミナゾコニ……オチテイクガイイ……

怖気を震わせる、重く冷たい声。肌を感じる粘り着くような空気と、艦装すら軋むほどの圧倒的な重圧。目視できないほど遠くにいるはずなのに、はっきりと輪郭が分かるほどの存在感は、怪物という名がふさわしい。

南方棲戦『姫』。鬼もひれ伏す、深海棲艦の頂点。

「撤退です！ 作戦は中断、最大戦速で海域から離脱！ 急ぎましょう！」

「で、でも、まだ一撃も……」

「言ったはずですよ。私たちは、生きて帰らねばなりません……絶対に！」

妙高の強い意思に、初風を除く全員が反対方向に回頭を始めた。初風は一瞬躊躇したが、旗艦の命に背くわけにはいかない。体をひねり、来た道と反対方向へと回頭を始める。

甲高い音が、空を切り裂いた。続いて、武器庫でも爆発したのかと思うほどの轟音。思わず耳を塞いだ初風の背後に、今までのものとは比較にならないほどの巨大な水柱が、次々とそそり立

った。

続いて、巨大な衝撃波が来る。

「きゃあツツツツ!？」

「!？ 初風、大丈夫ですか!？」

妙高からの無線が飛ぶが、最早それに応えられるような状態では無かった。何とか姿勢制御は出来たものの、全身は濡れそぼり、爆音に晒された所為で音も聞こえにくくなっている。平衡感覚にも支障を来し、まっすぐ進めている自信も無い。

恐怖よりも先に感じたのは、疑問だった。何故、あんなに遠くから攻撃が届くのだろう。何故、あんな化け物に私が勝てると思ったのだろう。何故、私はここに来てしまったのだろう。何故、何故、何故？

初風は、進んだ。進み続けた。自分の信じる方へ。自分の信じた方へ。声が聞こえる。自分を呼ぶ声が聞こえる。自分を叱りつける声が、勇気づける声が、褒めてくれた、あの声が。

そして、伸ばした手が、彼に届き、

「初風————!!」

初風の体が、宙を舞った。

○

彼女は、そっと目を開いた。

たくさんの、自分を呼ぶ声がする。

たくさんの、自分に伸ばされた手が見える。

ここへおいで。くらくて、しずかで、やすらげるばしょへ。

懐かしい声だった。

優しい、声だった。

その手を取れば、きっともう戦わずに済むのだと思った。

その手を取れば、ずっと静かに眠っていられるのだと思った。

だけど。

「……はつかぜ」

だけど、ここは、私の居場所じゃない。

○

「初風。……聞こえるか、初風」

その声は、初風には酷く懐かしく聞こえた。たった数日しか離れていなかったはずなのに、もう何年も聞いていなかった気さえする。そう思いながら、彼女はゆっくりと目を開けた。

光に慣れていないせいか、目の前が霞んで見える。目を擦るのに右手を持ち上げようとしたが、ぴくりとも動かなかった。それどころか、腕そのものが無くなってしまったかのように、そこにあるはずの右腕を認識できないでいる。

「無理に動こうとしなくて良い。そのままです」

ようやく浮かび上がってきた輪郭は、優しい声で初風に語りかけた。提督なの、と呼びかけたつもりなのに、声は出ない。ただ、ひゅーひゅーと空気の漏れるような音だけが、彼女の口から漏れていく。

ぼんやりとした頭が、何かを思い出そうとして空回りする。自分は、敵と戦った。そして、逃げた。逃げて、逃げて、逃げて、それから……？

視界が、少しずつ明瞭になっていく。彼女の目の前に、予想してたとおりの提督の顔が見えた。難しい顔をして、じっと自分のことを見ている。近衛護少将。齢三十五にして少将まで上り詰めた名将。そして、私の提督。

その目から、ひとしずくの涙が零れた。

ねえ、提督。何故泣いてるの？ 私が酷いこと言ったから？ 私がずっとわがまま放題してたから？ それとも、私が勝手に出撃しちゃったから？

彼女が言葉を紡ぐたびに、出来損ないの空気が口から漏れる。そんな彼女を見て、近衛は歯を食いしばる。涙が一つ、また一つと流れ、滴れた雫が彼女の頬を暖かく染める。

ねえ、提督。涙を拭いてよ。いつものように叱ってよ。いつものように、頭に拳骨ちょうだいよ。そしたら、いつもみたいにため息ついて笑ってちょうだいよ。

ぱくぱくと、唇が動く。ただ、動く。声は、響かない。

ねえ、提督。何故、私の声が聞こえないの？何故、私の声が届かないの？

ねえ、ねえ。

「……もう、良いんだ、初風。もう、良い」

近衛の震える声が、初風の鼓膜を震わせる。その瞬間、彼女は全てを思い出した。南方棲戦姫の砲撃が、自分を直撃したときのこと。紙切れのように吹き飛び、海面に叩きつけられ、悲鳴を上げていた首が、折れた。

そっか。私、もう、沈んじゃったんだ。

全てを理解した初風は、ふーっと長い息を吐いた。自らの全てを、そこに残していくかのように。そして、声の出ない声で、近衛に語りかけた。

ごめんね、提督。わがままばかり言って。

ごめんね、提督。嫌なことばかり言って。

提督に、もっと強くなって欲しかったから……提督に、勝利の栄光をつかみ取って欲しかったから。

だから……次に会うときにはもっともっと強くなってね。約束よ。

聞こえないと分かってても、言っておきたかった。彼女の本当の心を。本当の思いを。そして

、もうそれを伝える術が無いことを知って、初めて彼女は涙を流した。もう二度と、彼に思いを告げられない、浅はかな自分に対する悔恨の涙を。

けれども。

「……分かってるよ、初風」

近衛の言葉に、初風は目を見開いた。

「私は、強くなる。強くなって、必ずこの戦いを終わらせてみせる。もう二度と、お前達を沈めたりしない」

近衛の右手が、初風の頬に触れた。手袋越しにも分かる体温に、彼女の頬が緩む。ああ、ちゃんと伝わっていた。言葉にならなくても、この人には、ちゃんと。

初風の瞼は、ゆっくりと閉ざされた。吐息が、聞こえなくなる。

近衛の左手は、血が滲むほど硬く握られていた。隣に控えていた妙高と雪風が、涙を堪えて近衛の肩に手を添える。

近衛はゆっくりと立ち上がり、初風に向けて敬礼を送った。周りにいた全員が、それに習う。初風は、微笑んでいた。満足そうに、ずっと。

○

「お久しぶりです、近衛先生。元帥昇進、おめでとうございます」

「おお、斑目君か。遠路はるばる良く来た」

敬礼する斑目中将の姿を見て、近衛は目を細めた。二十年来の教え子となる彼は若くして中将にまでのし上がった傑物だが、久々に会うその姿からはそんな威厳は微塵も感じられず、近衛は微笑ましく思う。

横に目をやると、栗色の髪に巫女装束のような出で立ちの娘が同じく敬礼して立っていた。

「そちらの娘さんは、君の秘書艦かね？」

「ハイ！ 斑目提督の秘書艦を勤めさせて頂いている、高速戦艦金剛デース！ よろしくお願ひしマース、近衛元帥！」

「ふむ、元気そうな娘さんだ」

そう言って笑うと、「立ち話もなんだから」と近衛は二人を執務室の脇に備え付けた応接間へ案内した。備え付けられたソファに腰を落ち着ける二人の前に自分も座ると、改めて二人の来訪をねぎらった。

「しかし、早いものだ。中学校を卒業したばかりの君が私の元を訪れて、もう二十年。ついこの間まで海軍兵学校を卒業したばかりと思っていたが、いつの間にか最年少中将だ」

「その話、私が少将になった時もされてましたよ、先生」

「ん、そうか？ 年寄りには忘れっぽくてな」

ははは、と豪快に笑う近衛に、斑目と金剛もつられて笑う。しばらく歓談していると、執務室の扉がノックされ、茶菓子を持った女性が入ってきた。背の高い女性は机の上に茶と茶菓子を置くと、「ごゆっくりなさってください」と二人にほほえみかけ、そのまま部屋を後にする。

その姿を目で追った後、斑目は寂しそうな顔で近衛を見た。

「今も、特定の秘書艦は置かれていないのですね」

その言葉に、近衛は決まりの悪そうな顔をする。

「笑ってやってくれ、斑目。もう三十年も経とうというのに、私の心には小さな穴が空いたままなのだよ」

そう言って、近衛は湯飲みを取った。中身を半分ほど一気に飲み下し、ふっとため息をつく。

「南方海戦……ですか」

斑目の言に、近衛は懐かしむ思いと苦渋の混ざった、複雑な顔をした。

初風を喪った後、近衛は戦隊を一度解散した。秘書艦であった妙高はそのまま近衛の元に置くこととなったが、他は完全に入れ替わり、固定の艦隊を持たずにひらすら所属する艦娘の練度を上げることにこだわった。結局、南方棲戦姫はさらに半年の攻防で戦艦長門の率いる艦隊が撃破したが、それまでに南方から次々と侵攻してくる深海棲艦の群れを駆逐し続けられたのは、近衛の功績が大きいと言われている。

その後、近衛は艦装を解体した妙高と夫婦となるが、以降の執務において固定の秘書艦を持っていない。秘書艦代理としても彼を支えた初風の事を思い出すのだと。

「三十年前、私はこの戦いを終わらせると誓った。だが、深海棲艦どもは今も世界中の海を我が物顔で回遊し、サーモン諸島近海では、新たな姫級棲艦の影がちらついているとも聞く。誓いを果たせぬ限り、私の中に空いた穴は塞がらない」

そう言って近衛は立ち上がると、本棚から一冊のファイルを取り出した。それは、彼自身が経験してきたこれまでの戦いとその戦略・戦術をまとめたもの。彼のこれまでを凝縮した一冊とも言える。

「頼まれていたものだ。これは、君に託すのが一番良い」

「ありがとうございます。光栄です」

手渡された百科事典ほどもあるファイルを、斑目は大事に抱えた。これから開戦することになるであろう戦いのために、このファイルは貴重な資料となる。

斑目と金剛はそれぞれ茶を飲み干すと、再び丁寧に礼を述べた。また顔を出すように告げ、近衛は二人を執務室の外まで見送ろうとする。しかし、その前に扉がロックされ、室外から男の声が聞こえた。

「近衛元帥。本日着任した艦娘が、元帥にご挨拶を述べたいと訪ねておりますが」

「ふむ？ 本日の着任予定は聞いておらぬが……まあ良い、通してくれ」

首を傾げながらも近衛が許可すると、扉が開いて一人の少女が姿を現した。その姿を見て、近衛の表情がさっと変わる。

スモークブルーの髪。白いシャツにグレーのベストとスカート。胸元に黄色いリボンをつけた彼女は、肩まで伸びた髪をかき上げ、涼しい目で近衛を見、そして敬礼した。

「本日付で呉鎮守府に着任した、駆逐艦初風です。よろしく」

鼓動が早くなり、目頭が熱くなる。近衛はゆっくりと少女に近づくと、震える指先を無理矢理押さえ込み、彼女の前で敬礼を返した。

「よ、良く来てくれた。呉鎮守府の司令長官、近衛護だ」

懸命に冷静さを保とうとする近衛。少女は二回りは大きい彼の前に一歩進み出て、歴戦のしわが刻まれた男の顔を覗きこむと、悪戯っぽく笑って言った。

「提督にとって、私は何人目の私かしら、近衛護少将？」

それが、限界だった。近衛は目の前の少女をしっかりと抱きしめると、人目もはばからず涙を流した。少女は優しい笑顔になって、彼の背中をポンポンと軽く叩いた。

「ただいま、提督」

「ああ……お帰り」

斑目と金剛はそんな二人の姿を見て、顔を見合わせると、どちらとも無くくすりと笑った。そのまま、黙って執務室を退室する。長い長い時間の隙間を埋めていく二人を、邪魔しないように

。

(了)